

## マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～ 4

朴 希沙 (Kisa Paku)

前回は、マイクロ・アグレッションに関して行われた興味深い実験を紹介し、なぜ露骨なレイシズムだけでなくマイクロ・アグレッションについて検討することが必要であるかを述べました。今回もふりかえりを行った後、ひとつの事例を紹介し、マイクロ・アグレッションによって生じる「キャッチ 22 状態」について述べたいと思います。

### ・はじめに ～前回のふりかえり～

私は現在、日本から遠く離れたフィンランドに来ています。今年の夏はフィンラン

ドの人々にとっても猛暑とのことですが、気温は暑くて 30 度前後、夜は肌寒い日もあります。クーラーをつけなくても過ごせる程度の暑さ、という感じでしょうか。

私が暮らしているユヴァスキュラという街は静かなところで、少しのお店と住宅街、あとは湖や森が広がっています。運が良ければうさぎやハリネズミを見ることができ、特段何があるというわけではないのですが落ち着いて過ごすことができる場所です。6 月～9 月まで、3 ヶ月の滞在ですがそれももう半ばを過ぎてしまいました。

普段の生活から離れて見知らぬ土地で過ごしていると、これまでの自分の生活やこれからのことについて少し距離を持って考

えることができるようです。私は現在、大学院に在籍し、マイクロ・アグレッションについてここで紹介したり、マイクロ・アグレッションに関する翻訳書を出版したりしようとしているわけですが、自分が一番したいことは、むしろマイクロ・アグレッションをどのように乗り越えていくことができるのか、その対話の在り方について考えることだと改めて思っています。また日々マイクロ・アグレッションを体験している人々が、いかに自らの暮らしやささやかな体験、願いや欲求といったものと社会的・政治的な状況とを有機的につなげながら、視野を広げ新たな視点を獲得していきけるのか、という問いについて探求していきたいと思っています。

さて、今回は旧来の露骨で明確な形の差別（近頃でも露骨で明確な形の差別が散見されるため、もはや“旧来”でもないかもしれないが…）と、そのかげに隠れて見えにくい曖昧なマイクロ・アグレッションの両方がともに有害であることを述べました。特にマイクロ・アグレッションは被害者においてその精神的エネルギーを枯渇させてしまうという特徴があります。今回は、マイクロ・アグレッションを受けた結果被害者に生じる内的なプロセスの一端を紹介し、それがいかに認知的エネルギーを消耗させ本来の課題から注意をそらしてしまうかについて述べました。また認知的エネルギーに関して行われた実験を紹介することを通して、表面上の行動の下に存在する隠れた差別によっていかに被害者が困惑させられ、心理的エネルギーを消耗させられてしまうか、ということについて述べました。マイクロ・アグレッションは分かりにくい

ために、被害者にある種の疑惑や迷いをもたらします。今回はその疑惑や迷いについて、ひとつの事例を紹介した後、「キャッチ22状態」という用語から解説してみたいと思います。

### ・マイクロ・アグレッション：イントロダクション③

#### -事例②：スーのケース

この事例は、『Microaggressions in Everyday Life』の著者、Derald Wing Sue が実際に体験し、著作にも載せているものです。

スーはある時、アフリカ系アメリカ人の同僚と hopper と呼ばれる小さな飛行機に乗ります。飛行機に乗り込んだ時、スーたちは（白人の）フライトアテンダントに「ここに座ってもよい」と言われました。そこで、スーたちは一番前の空間を広く使える座席を選んで座りました。その座席は、向かい合う形の座席になっており、前の席は空いていました。するとその後、スーツをきた白人の男性たちが飛行機に乗り込めます。そして彼らはスーたちの前に座りました。

飛行機が離陸する直前、先のフライトアテンダントは深く頭を下げた上でスーたちの会話を遮り、飛行機の後方に移動してもらえないかと頼んできました。フライトアテンダントは、「飛行機の重さを均等に配分しなければならぬから」と言ってきたのです。以下より、本文から引用します。

・・・(有色人種の客である) 私たち二人は、

似たようなネガティブな反応をした。飛行機の重さのバランスを保つのは必要なことだと思ったものの、なぜ私たちだけが声をかけられるのだろうか？私たちは最初に搭乗した客で、3人の白人男性は最後に乗り込んできたというのに。なぜ彼らは移動することを頼まれないのだろうか？私たちは、私たちの人種のために選ばれたのだろうか？それとも人種などには関係なく、誰にでも起こる偶然の出来事なのだろうか？私たちは、気にしすぎのしみったれた人間なのだろうか？私たちは飛行機の後方に移ることに従ったものの、二人とも憤りと、苛立ちと、怒りを感じていた。そして私たちの日々の人種的な経験の観点から、同じ結論に至った。フライトアテンダントは私たちの人種を見て、私たちを2流市民として扱ったのだと。しかしこの出来事はここでは終わらなかった。落ち着くように自分に対して言い聞かせていたにも関わらず、私は自分の血圧が上がっていき、心臓を打つ速度が高まり、怒りで顔が赤らんでいるのを感じた。そしてそのアテンダントが私たちのシートベルトが締まっているかを確認しに来たとき、私は自分の怒りをこれ以上我慢していることができなくなった。自分をコントロールしようと懸命に努力しながら、私は彼女に無理に作った穏やかな声で話しかけた。「あなたは、2人の有色人種の客に対して、『バスの後方に行け』と頼んだことを自覚していますか？」と。数秒の間、フライトアテンダントは何も言わなかったが、ぞっとしたような表情で私を見つめた。そして、それが当然とばかりに怒った声で「そうですね、私は今までそのように責められたことはないんですが！よくそんなことを

おっしゃることが出来ますね？私は人種で判断などしていませんよ！私はただ飛行機のバランスを保つためにあなたがたに移動をお願いしただけです。とにかく、私はあなたがたにより広い、よりプライバシーが守られる空間を提供しようとしただけです」と言った。

私の考えと感情を説明しようとする試みは、彼女をより防衛的にさせるばかりだった。私が主張するたびに、彼女は自身の行為に対する客観的な理由を伝えようとした。ついにそのフライトアテンダントは会話を打ち切り、これ以上この出来事について話し合うことを拒否した。もしも、私の経験のリアリティに価値を認めてくれる同僚がいなければ、私はこの出来事に対する自分の反応が正しかったのか間違っていたのかをさまよい続けることになっただろう。しかしそれでも、残りのフライトの間中、私はこの出来事に対して気をもみ、苦い後味を感じ続けていた (Sue, Capodilupo, et al., 2007, p. 275)。

上記の事例では有色人種である乗客と白人のフライトアテンダントの両方に引き起こされた心理的なジレンマが描写されています。しかし両者の経験と解釈は異なっていました。このような時、認識の正確さに関する心理的ジレンマが引き起こされ、「誰の現実感覚が正しいのだろうか？」という疑問が生じます。さらにいえば、もし受け手が「これはマイクロ・アグレッションではないか？」と思ったとしても、加害者が自らの意図に気づいていない場合に、どうやってそれを証明すればよいのでしょうか？

このことに関して、著作では①人種的リアリティが白人と黒人で異なっていること、②意図的ではない差別というものは可視化することが非常に難しいこと、③マイクロ・アグレッションの有害性が矮小化されることといった観点から解説されていきますが、今回はこのような場面で被害者（ここではスー）に生じる「キャッチ 22 状態」について説明したいと思います。

### ・キャッチ 22 状態

マイクロ・アグレッションが生じると、その受け手は非常に困った状況に立たされることとなります。それは、「キャッチ 22 状態」と呼ばれています。

例えば、先の事例でフライトアテンダントが有色人種の乗客にのみ飛行機の後方に移動するよう頼んだ時、乗客には様々な疑問が浮かぶと考えられます。それは例えば「こんなことが本当に起こるのだろうか？これは意図的な行動だろうか、それとも悪気なくしてしまった侮辱だろうか？自分はどうかどう応えるべきだろうか？モヤモヤしたまま座っているべきか、対決すべきか？この話題を持ち出すとして、どうやってそれを証明する？努力する甲斐のあることだろうか？何事もなかったことにすべきだろうか？(Sue, Capodilupo, et al., 2007, p. 279)」といったことです。ここでは、1. 真実を見極めること、2. 侮辱や否定から自分を守ること、3. どんな行動を取るべきだったかを確認すること、に心理的エネルギーが費やされています。

そしてその結果、マイクロ・アグレッシ

ョンに対する最もよくあるリアクションは、何もしないことのようにです。これは、①マイクロ・アグレッションが起きたかどうか断定できないため、②どのような応答が最適なのかが分からず応答を決められないため、③マイクロ・アグレッションは瞬間的に生じる出来事なので応答する前にそれが過ぎてしまうため、④自らを守るために経験したことを否定し何も起きてないと信じ込もうとするため、⑤状況に対して行動を起こしても何もいいことはないという考えるため、⑥行動した結果より不利な状況に立たされることを恐れるため、といったことが背景にあるようです。

例えばマイクロ・アグレッションが生じた際、それについて加害者と話し合おうとすれば何が起きるのでしょうか？そもそも意図せずマイクロ・アグレッションを行った人に、なんと伝えればよいのでしょうか？マイクロ・アグレッションと対決することを決めた結果、敏感過ぎで、こだわり過ぎな「怒りっぽいマイノリティ」というレッテルを貼られてしまうかもしれません。そして、結局の所、そのような感情的な態度や怒りは加害者から病的な人間だと扱われることにつながってしまうかもしれないのです。レッテルを貼られることを始めとした報復に対する恐れは、社会の中で軽んじられている人々の頭の中に常にあると言えます。

Sue はその著作の中で、アフリカ系アメリカ人が差別に対して抗議すると「敵対的で、怒りっぽく、衝動的で、すぐ暴力に訴える」というアフリカ系アメリカ人に対す

る思い込みが強化されてしまうことがあると述べています。確かに、もし抗議する人が異常でないのだとしたら、マイクロ・アグレッションを行ってしまった側に何か問題があるということになります。しかしマイクロ・アグレッションは非常に見えづらいために、被害者に問題があるとみなされやすいのです。

キャッチ 22 状態というのは、このような状況を表すための用語です。この用語はもともとジョセフ・ヘラーの小説の名前で、そこでは何を行っても除隊がかなわない戦争の狂気が描かれています。つまりキャッチ 22 状態とは、何も行動を起こさなくても地獄、しかし何か行動を起こしても地獄、という状態のことです。この心理的な葛藤や八方塞がりの状態が被害者の精神的エネルギーを枯渇させてしまうことは明らかです。なおもやっかいなことに、マイクロ・アグレッションは露骨な差別とは異なり、マイノリティ同士のつながりも難しくさせてしまいます。マイクロ・アグレッションを取り扱うことは非常に複雑で一筋縄ではいけないために、容易に「ことを荒立てない方がいい」「くよくよ考えない方がいい」「大したこと無いのに、何をそんなに悩んでいるの？」といった反応を引き起こしてしまうからです。

私はマイクロ・アグレッションの最も深刻な特徴は対話を不可能にさせる点にあると考えています。例えば、旧来の明確な形をとった差別であれば、少なくともその問題を共有し、差別に対して抗議するといった「応答」が可能でした。しかしマイクロ・アグレッションの場合は、差別的なニュア

ンスを含んだ行為であるにもかかわらず、それについて話すことが上記のような理由から困難になります。そしてそれはマイノリティの孤立化にもつながっていくと考えています。

以上、今回はひとつの事例からマイクロ・アグレッションによって生じるキャッチ 22 状態を紹介することを通してマイクロ・アグレッションがその受け手にもたらす影響の一端を紹介しました。次回は、スペクトラムという観点から露骨な差別とマイクロ・アグレッションについて考えてみたいと思います。

・・・続く

#### 【参考文献】

- Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M. (2007). Racial microaggressions in everyday life: Implications for clinical practice. *American Psychologist, 62*, 271-286.
- Sue, D.W. (2010). *Microaggressions in Everyday Life: Race, Gender, and Sexual Orientation*. Hoboken, N. J.: John Wiley & Sons.